

名所図会に描かれた茅葺建物に関する研究

A study on the thatched-roof buildings described in the Meisho-zue

夏 雪雪
XIA Xuexue

1. 研究の背景

図会は「ある種の図や絵を集めたもの」¹⁾と解説されている。近世には神社・古跡・景勝地などの「名所」を訪れる旅行が盛んになり、名所に関する絵、所在地や故事来歴などの情報が掲載された「名所図会」が多数出版された²⁾。また「名所図会」は編者と画家現地調査を踏まえて、詳細な挿絵をつけたものが多いとされる³⁾。

図会には当時の様子が描かれており、正確さにばらつきがあるものの、ある程度の信頼性はあると考えられる。近世の絵画を対象とした研究として、萩島らは歌川広重の浮世絵に描かれた宿場景観は瓦葺きの寺社や城などの特殊な建物より、むしろ茅葺きの民家、商店、茶店、宿などであることを示した⁴⁾。

一方、近世から近代にかけてみられた建造物の中でも茅葺きに関しては不明な点が多い。民家研究において耐久性のある建物は戦国期に出現し本州に広がった後、地域性が見られるようになったのは江戸時代中期以降であるとも言われている⁵⁾。

そこで、本研究は建物の中でも近世の状況が把握されていない茅葺建物を対象とし、名所図会から特徴を把握する。茅葺建物が絵の構成要素としてどのように描かれ、どのように使われていたか明らかにする。そして、近世における茅葺き建物の歴史の基礎的な知見を得ることを目的とする。

2. 研究の方法と研究の対象

本研究は角川書店が1979年から1988年にかけて出版した「日本名所風俗図会」を用いた。この全集は日本の名所、風俗資料としての絵本を集めた文献として編纂されたもので、近世の絵図を最も多く網羅している。収録されている合計71冊の図会を対象とし、建物がありかつ屋根材が分別できる絵を抽出し、茅葺建物の有無、数、屋根形態、用途などの茅葺建物に関するデータベースを作成した。データの分析に基づいて、江戸時代における茅葺建物の状況や特徴を考察した。

3. 茅葺き建物の全体の傾向

(1) 描かれた絵と建物の数 (表1)

71冊の図会に掲載された7,174枚の絵を対象とした。そのうち2,408枚(33.6%)の絵に茅葺建物が描かれていた。描かれた茅葺建物の絵の中で675枚が近景図で、1,733枚が鳥瞰図だった。

描かれた合計54,848棟の建物のうち29,584棟の建物が茅葺建物で、53.9%と半分を超えている。茅葺建物が当時ではありふれた存在であったと考えられる。

表1 描かれた絵と建物の数

地域	建物のある絵 (枚)	茅葺建物のある絵 (枚)		建物の数 (棟)	
		近景図	鳥瞰図	茅葺建物	茅葺以外
東北	227	14	71	756	887
関東	1,490	221	325	10,110	4,380
中部	837	65	203	1,525	3,226
近畿	2,579	196	551	9,246	8,215
中国	312	18	81	830	844
四国	287	15	84	834	1,161
九州	252	4	93	762	289
諸国	1,190	142	325	5,521	6,262
合計	7,174	675	1,733	29,584	25,264

(2) 屋根形態 (表2)

屋根形態が不明な6,208棟を除いて、23,376棟の茅葺建物の中で、入母屋が最も多く18,982棟(81.2%)で、寄棟が3,984棟(17.0%)、切妻が410棟(1.8%)ある。東北地方、関東地方、近畿地方、中国地方、四国地方、九州地方では入母屋が最も多く、続いて寄棟、切妻の順である。入母屋がすべての地方に見られるのに対して、寄棟が関東地方に多くあったことがわかった。

表2 茅葺建物の屋根形態

地域別	入母屋 (棟)	割合 (%)	寄棟 (棟)	割合 (%)	切妻 (棟)	割合 (%)	不明 (棟)
東北	606	92.2	42	6.4	9	1.4	99
関東	2,693	50.6	2,467	46.2	168	3.2	4,792
中部	552	44.4	670	53.9	21	1.7	282
近畿	8,757	97.9	114	1.3	75	0.8	300
中国	768	97.6	10	1.3	9	1.1	43
四国	522	90.6	48	8.3	6	1.0	258
九州	442	67.8	197	30.2	13	2.0	110
諸国	4,642	89.3	446	8.6	109	2.1	324
合計	18,982	81.2	3,984	17.0	410	1.8	6,208

(3) 用途 (表3)

用途がわかる茅葺建物には多様な用途が見られた。茶店、工房などの商業施設が6,783棟(57.6%)で最も多く、ついで神社、寺などの宗教施設が2,592棟(22.0%)で、農家、漁家などの民家・集落が2,406棟(20.4%)だった。

表3 茅葺建物の用途

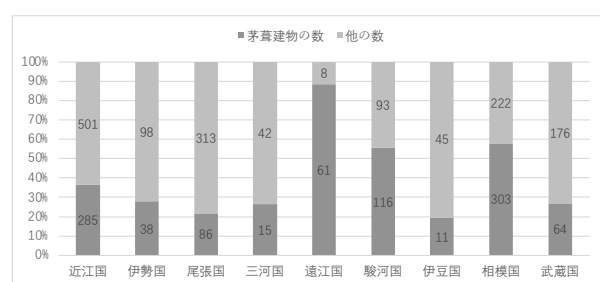
用途	数 (棟)	
商業施設	茶店	71
	工房	136
	宿	84
	不明・その他1	6,492
宗教施設	神社	589
	寺	1,792
	その他	264
民家・集落	農家	1,299
	漁家	118
	不明・その他2	1,000
不明		17,789

さらに、用途によって、茅葺屋根の描き方や軒先の状況が異なることが確認できた。例えば、寺社の場合はまっすぐな点線で茅を表現し、軒先は切り揃えられ立派な庇がついていることが多いのに対し、民家の場合は棟から軒先までゆるやかな点線で茅を表現し、軒先の茅を揃えていないものが多い。用途によって茅の葺き方に違いがあったと考えられる。

4. 「木曾路名所図会」と「東海道名所図会」

地域と変化を把握するために、資料性が高い「木曾路名所図会」(一八〇五)、「東海道名所図会」(一七九七)を取り上げ、それぞれの茅葺建物を分析した。

屋根形態はすべての地方で入母屋が最も多く、寄棟は近畿地方より関東地方に多かった。さらに国ごとの違いが明らかになった。「東海道名所図会」では遠江国の88.4%に対し尾張国が僅か21.6%で、国によって描かれた茅葺建物の状況に大きな差があることがわかる(グラフ1)。



グラフ1 国ごとの茅葺建物の割合

5. 詳細に描かれた事例

最後では、6枚の茅葺建物が大きく詳細に描かれた絵を抽出し、記述や絵から茅葺建物に関係する当時の生活様式を把握した。「榎尾山坊舎」では、寒さに強いという茅の特性を利用し、坊舎や倉に用いられていたことがわかった。さらに、主に西南日本のみ分布針目覆と呼ばれる屋根の棟仕舞を確認することができた。

6. 考察

江戸時代において、茅葺建物が数多く存在していたことがわかった。山や川などの自然環境が豊かなところだけではなく、賑やかな街道にも多くの茅葺建物が建てられていたことがわかった。図会には主に社寺や宿場などの名所を対象としているため、用途の分析では民家・集落として使われる茅葺建物が少ないが、実際に農村地域ではより数多く存在していたのではないかと考える。

このように茅葺建物がさまざまな環境に適応し、江戸時代においても身近にあり人々のさまざまな生活需要を満していたことが明らかになった。

参考文献

- 三省堂編集所「広辞林」 昭和53年 pp.1052
- 富澤達三 解題「東海道名所図会」の視点 『日本近世生活絵引』東海道編 神奈川大学 21世紀 COEプログラム研究成果報告書 2007.12. pp.111-116
- 「名所図会の世界」名古屋市博物館 1988.10. pp.6
- 萩島哲・坂井猛・鶴心治 「広重の浮世絵風景画と景観デザインー東海道五十三次と木曾街道六十九次の景観」九州大学出版会 2004. pp.45, 102
- 光井渉「日本の歴史的建造物」中公新書 2021. pp.173

Abstract: This research focuses on thatched buildings whose situation in the early modern period is unknown, and grasps the situation of thatched buildings from Meisho-zue published in the Edo period. It clarifies how the thatched building was drawn as a constituent element of the painting and how it was used. As a result, Irimoya was found in all regions. On the other hand, it turned out that there were many yosemune in the Kanto region. And it became clear that roofed buildings were adaptable to various environments, and that they were familiar to people even in the Edo period and met various lifestyle needs.